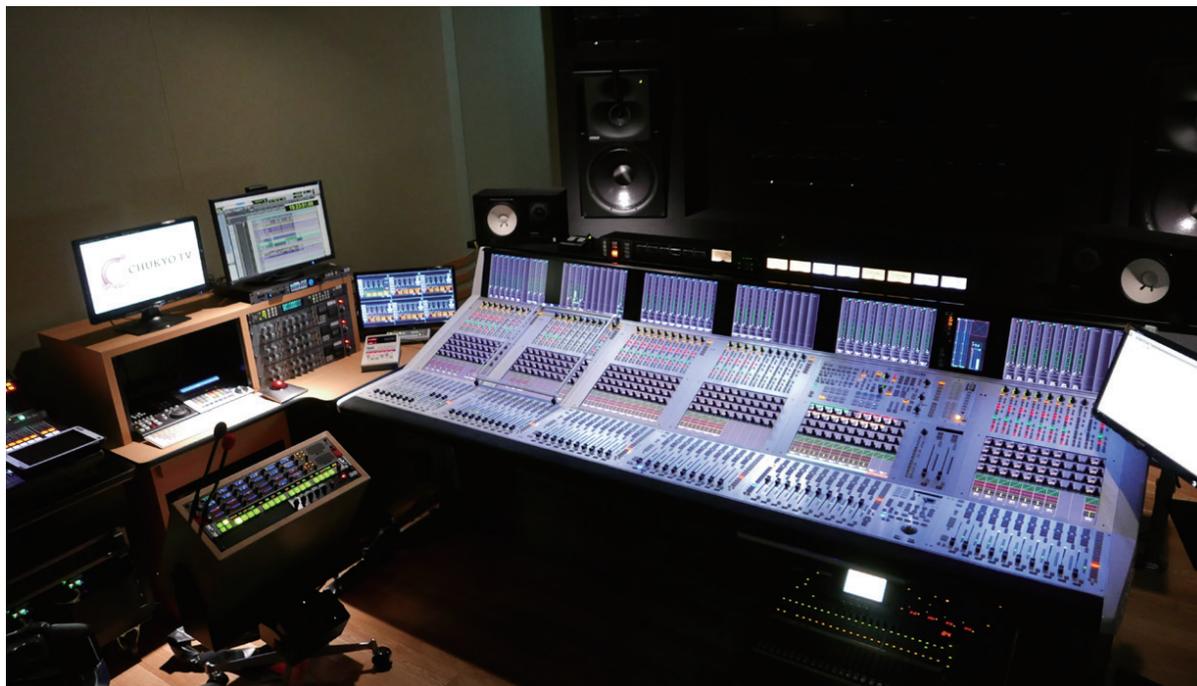


VISTA X ユーザーレポート

中京テレビ放送株式会社 様

Vista X-62F / Vista X-42F

新社屋A/BサブにVista Xを採用



中京テレビ放送株式会社
技術推進局 放送技術部
和田 拓也

第二の開局

1969年4月に開局した中京テレビは、2016年、「第二の開局」を掲げ、名古屋駅さしまライブ地区に新社屋を建設し、移転することになりました。通常のスタジオ更新とは違い、建築設計の段階からスタジオを作るという、貴重な経験をさせていただいたと思います。

スタジオは制作スタジオ2つ、報道スタジオ1つ、夜ニュースやローカル差替え用の顔出しエリア1つ、サブはA及びBの制作サブと、報道サブのC、そして報道サブのサポート的役割のミニサブDと、送り業務に特化したEサブがあります。今回、スチューダー殿には、A及びBの制作サブの音声システムを担当してもらいました。

A/Bサブ

A/Bサブは、背中合わせのスタジオ配置となっており、マシンルームは共通となりました。そのレイアウトを生かす為、サブとスタジオの組合せを入替えても運用できることを考慮し、音声卓、インカム、収録システム、パッチ盤の位置など、システム全体を考えていきました。

WLマイクやWLインカムなどの電波関連も、両スタジオで干渉が無く、通話エリアもなるべく大きくとれるように意識した設計をしています。また別の側面では、Aサブは報道サブの代替機能を持てるよう、映像モニターの枚数やN-1マトリックスのI/O数などの仕様を決めていきました。Bサブについては、ポスプロ作業への引継ぎがし易いように、様々な収録パターンへの対応を考慮したシステム（DAW収録、DAWとXDSを使った編集、サブからMAサーバーや編集サーバーへ接続し、データ転送を行えるようにする等）を、設計の段階で盛り込みました。また、音声モニター環境については、日本音響エンジニアリング殿に設計施工していただくことで、サブからMAまで、統一感のあるリスニング環境を目指しました。

VISTA X

VISTA Xに決定した要因としては、現社屋のAサブ、MA室、音声中継車で、VISTAに皆が慣れている事、そして過去に特別嫌な経験をした事が無いと言う実績が何より大きいです。Bスタジオは2マン・オペレートが絶対条件だったので、ベイごとにロックして使えるVistonicsはかなり有利でしたし、視認性が良く、触りたい機能に悩むことなく自然と手がでるデザインは、

VISTA 6の頃からそのまま踏襲されているという安心感もありました。リダントの考え方も物理的な故障（カードやコンソール）以外は二重化されています。A/Bサブの連携という点では、VISTAデスク同士を通信させ、入出力をお互いに共有できるRELINK接続としました。サブとスタジオを入替えての運用時に有効であると思います。また、Bサブの1部のHA/ADをステージボックス仕様としたことで、A/Bサブだけでなく音声中継車でも使いまわせる事も魅力的でした。さらにステージボックスと社内の光TRK回線を使うことで、隣接する公園を会場にした屋外イベントを、サブ・ドライブで行う事もできますし、公園に限らず、屋上や玄関ホール、極端に言えば、社屋内のどこでもスタジオとして使用する事が出来るので、今後、様々な運用の可能性があると思われます。

PA卓とスタジオスピーカー

お客さんを入れる番組では、PAオペレーターをスタジオに付けるのが理想ですが、スタッフ数の都合など難しい部分もある為、基本的にPA卓はサブに設置する事としましたが、iPadを利用したWiFiリモコンを使い1人でも出音を聞きながら調整できるようにしたので、今まで難しかった繊細なレベルコントロールが出来るようになり



ました。PA卓にはYAMAHA QL1を採用。可動台 + Rio仕様としたので、いつでもフロアに移動して使用する事が出来ます。ここでも光TRK回線を利用してサブのRioとスタジオのQL1を接続します。外部のPAさんが持ち込む卓がYAMAHAであればRioと繋がるので、番組の規模や事前の仕込みの都合によってPA卓を持ち込む事も可能です。頭分けや、回線の受け渡ししが格段に楽になりました。実際、10月から放送する音楽番組では、PA卓をフロアに持って行き運用しています。

また、スタジオ吊りスピーカーは、コンパクトでパワーがあり、音が崩れず指向性が明快であることという条件で、数社のデモを行い比較した結果、d&b audiotechnik社製に決めました。仕込み転がし用スピーカーはCODA D5-Cubeです。音質もさることながら、白色が選択でき、セットの中に置いても馴染みやすい点が魅力的で、採用しました。

N-1MTX

N-1MTXは報道サブと同じコンセプトで設計したいと考えBSS LONDONで構築しました。旧報道サブの国内メーカー製特注N-1MTXミキサーと同じ機能のものを、GUIで実現しました。A/Bサブで共用としたことで、電話回線の使い回しが出来るようになり、効率的に回線を使用でき

るようになりました。BSSで組んだことで、コスト面で有利になっただけでなく、将来、使い方や規模が変わった時も、ソフトウェアの改修で柔軟に対応出来る点も長所です。更にN-1MTXのBSSの画面は社内KVM MTXに取り込んでいるので、音声だけでなく、映像サブにいるTDやVEも状況を確認する事ができ、中継先への送り込みの選択をする事もできます。実際、既に報道サブでは、N-1MTXの切替は音声ではなくTDの仕事となっています。

新社屋ならではの番組制作

旧社屋では「MISO ROCK」という、名古屋シーンで活躍するバンドをフィーチャーした不定期開催の音楽番組がありました。新社屋移転を機に、番組名を『ササシマMUSIC BASE』に変更し、10月から月ペースでOALします。旧社屋と比べ、アクセスも良くスタジオも広くなった事で、お客さんを200人程度入れ、ライブハウスの雰囲気でも収録を行います。サラウンド制作も視野に入れつつ、新社屋ならではの番組制作を行っていきつもりです。

最後に

スチューダー、テクト、日本音響エンジニアリングのスチューダー・チームは、こちらの都合に合

わせて何回も足を運んでくれましたし、当初から工事の全体計画がしっかりしており、他セクションとの調整もやり易かったです。様々な他社との連携項目もうまく処理していただき、大変助かりました。映像と比べ目に見えない部分、レベルだけで測れない部分、個人の思想みたいなものが大きく影響する音声システムの構築において、途中で意見を変える事も多くあった我々に寄り添い、引っ張り、軌道修正してくれたと思います。単に要望を聞くだけではなく、逆に提案もしていただき、結果的に良い物になったと感じています。そして、もっとも大事なことは、最後まで使い易さと音の良さにこだわっていただいた点です。今後は運用で、新しい卓やシステムを使いこなし、良い番組をつくっていきたいと思います。今はまだ運用を安定させ、軌道に乗せていく段階ですので、引き続き、今後ともよろしく願い致します。

